

## 「にじのきらめき」の来歴及び特性の概要

### (1) 来歴

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（平成18年4月1日から平成27年3月31日までは独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構）において、平成21年に「西南136号」（後の「なつほのか」）を母とし、「北陸223号」を父として人工交配を行い、その後代から選抜し、育成した品種である。平成27年に「北陸263号」の系統名が付され、平成30年に「にじのきらめき」として出願公表された。

### (2) 特性

和歌山県内の栽培では、極早生品種に分類される「キヌヒカリ」より出穂が2日、成熟が5日程度遅く早生品種に分類される。草型は「中間型」に分類され、稈の太さは「中」に属し、「キヌヒカリ」より短稈で耐倒伏性は「強」である。芒は短く、穂の先端に極まれに生じ、顔色は「黄白」、ふ先色は「白」で、脱粒性は「難」である。穂発芽性は「難」に分類される。玄米の粒形及び粒大は「キヌヒカリ」より大きく、収量性が高い。玄米外観品質は「キヌヒカリ」より優れ、白未熟粒の発生が少ない。搗精歩合は「キヌヒカリ」並である。食味は「キヌヒカリ」より優れており、食味値が高い。